

岸和田・和歌山の近代和風建築をめぐる

～茶室建築家・三代木津宗詮の遺蹟を中心として～

中野 朋子 (学芸員)



2008年春、没後100年を迎えた大阪の粹人・平瀬露香の展覧会を開催した際に、露香ゆかりの茶人・木津宗詮について紹介する機会があれば、大阪の茶道文化を考える上でより一層意義深いのではないかと考え出してから4年、特集展示「大阪の茶の湯と近代工芸－武者小路千家の茶人・三代木津宗詮と大阪の職方－」が実現。この展覧会にあわせて企画したのが三代木津宗詮に関わりの深い2カ所の庭園をめぐる見学会です。

今年生誕150年を迎えた三代木津宗詮(1862～1939)は武者小路千家流の茶人でありながら、茶室建築、料理などにも見識が広く、「茶室建築家」と自称した人物です。昭和4年(1929)に節子(さだこ)皇太后のために新築された大宮御所内に竣工した茶室・秋泉亭(しゅうせんてい)の設計を手掛け、その名を高めました。秋泉亭の設計は、「宮内省御用 茶室造営作業所」看板(個人蔵)にも名前のある川上邦基からの紹介で三代宗詮に白羽の矢が立ったものでした。三代宗詮は秋泉亭のほかにも関西一円で多数の茶室や和風建築を手掛けており、今回は現存するなかから岸和田市の「五風荘」(旧南木荘、現在は「がんこ岸和田五風荘」として営業)と、和歌山県南海市の「琴ノ浦温山荘園」を見学、三代宗詮の建築について学びます。

岸和田市の「五風荘」(旧南木荘)は、旧岸和田城主岡部氏の新御茶屋跡を明治維新後に岸和田紡績の寺田利吉氏が買い取り、昭和4年(1929)から約10年の歳月をかけて整備したものです。主屋と3つの茶室がある回遊式庭園に三代宗詮の設計によるとされる茶室が建てられています。寺田氏が石を好んだこともあって庭園には立派な灯籠や層塔も配置され、また東大寺塔頭中性院の表門も移築されています。

南海市の「琴ノ浦温山荘園」は日本初の動力伝動用革ベルト製作で知られる新田帯革製造所(現・ニッタ株式会社)の創業者・新田長次郎により造園された別邸で、新田氏の雅号“温山”から東郷平八郎元帥により「温山荘」と命名されました。18,000坪を誇る大庭園は、新田氏の在世中から一般にも開放、没後はその遺志により「財団法人琴ノ浦温山荘園」が設立されました。(例年12月1日からは冬季休園となります。)



「宮内省御用 茶室造営作業所」看板(個人蔵)

ザ・タワー

今井 章夫

特別展「ザ・タワー」の講演会（講師：橋爪伸也氏）を歴博4階で拝聴した。洋の東西を問わず、塔に人々が登ることは許されなかった。宗教上の決まりがあり、人々は地上から塔を仰ぎ見て、慎み深い心に浸るべき建物であったからである。ところが近代になり、さまざまな禁制がなくなり、大阪に限っても、明治に入ると、明治21年には眺望閣（32メートル・5階）が浪速区に、翌22年には凌雲閣（49メートル・9階）が北区に、36年には早くも人の乗るエレベーター付の大林高塔（50メートル）が天王寺区に姿を現したと聴いて、本当に驚いてしまった。いずれも宗教とは無関係で、「人寄せ」のためと言う。

大阪だけではなく、日本各地で、そして世界各地で、天を突く高層建築が構築された。物知らずの私は、往年エレベーターで、パリのエッフェル塔に登った折、足下にうねるセーヌ河を見下し、豆粒ほどの通行人の姿を見て、身のすくんだ事が忘れられない。人間の傲慢さが空恐ろしくなった為である。

しかし、報道によると、電波塔の役目があるとは言え、新築の東京スカイツリーは何と634メートル。旅行社は「スカイツリーに登るパック旅行」まで出す始末。私にはますます判らなくなって来た。

橋爪先生の準備万端行き届いた講演が終わり、歴博のエスカレーターで降りる。左下には私にとって不足でも、余分でもなく、ぴったりの高さの大阪城天守閣がそびえている。「いいなあ!」と思う。6月17日（日）の夕暮れであった。

第1回続熊野街道見学会に参加して—事跡に先人を偲ぶ—

長村 常弘

10月の晴れた日、第1回続熊野街道見学会に参加。八軒家浜の復元燈籠を見て、熊野街道の「浜路」（今の「松屋町筋」に当る）の起点の大川の渡辺津跡を確認。次に窪津王子を訪ね、そして「浜路」に入る。平安貴族も往来したであろう往時を地形や住居の並ぶ様に偲ぶ。途中、南大江公園内の坂口王子伝承地（朝日神明社跡）に立ち寄る。狸が祀られていた。説明板の絵図の本殿に通じる坂が今、上って来た坂だと思わせる風情が残っていて、「大都会の大阪は比較的昔の姿が残っている」と講師の大澤先生の話であった。さらに松屋町筋を行くと通りに勤皇の志士「大和鼎吉」（享年22歳）の辞世の碑があった。皆さんに助けをもらいながら読むと、「ちりばかりかるき身なれど大君にこころばかりは報ゆなりけり」とあった。生国魂神社に到着。4m近い重厚な石造の2基の、大きく常夜灯と彫られた現品燈籠に对面。基壇部分に、堺屋源兵衛（願主・世話人）のほか、建立にかかわった人の名がぐるりと彫ってあった。総勢約90人とか。当時、無明の浜での夜間の船の乗下船、荷物の積み下ろしは不便であった。加えて旅人の安全のために町の有志が「燈籠」の設置を奉行所に願い出て実現したという。この見学会を通して先人たちの苦労と心意気を碑の名前から、そして先生のご説明から偲ぶことができたのは、意義のある1日を過ごさせていただいたと感謝している。先生と事務局の皆さんに改めて御礼を申し上げます。

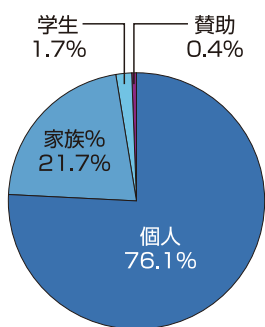


南大江公園内の坂口王子伝承地（朝日神明社跡）

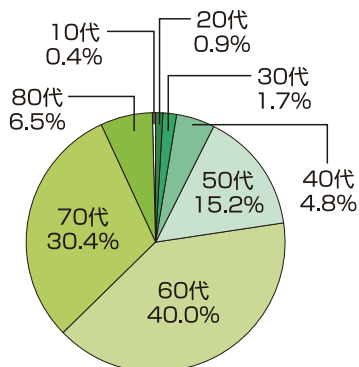
友の会 アンケート集計結果

先日ご協力いただきましたアンケートの集計結果をお知らせいたします。

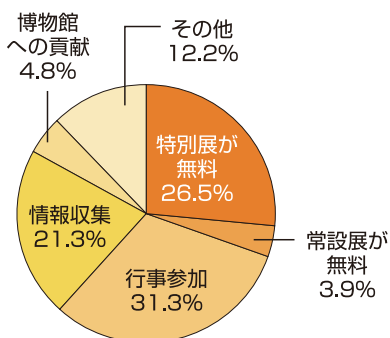
【実施期間】2012年8～9月 【発送数】344通 【回答数】230通 【回答率】66.9%



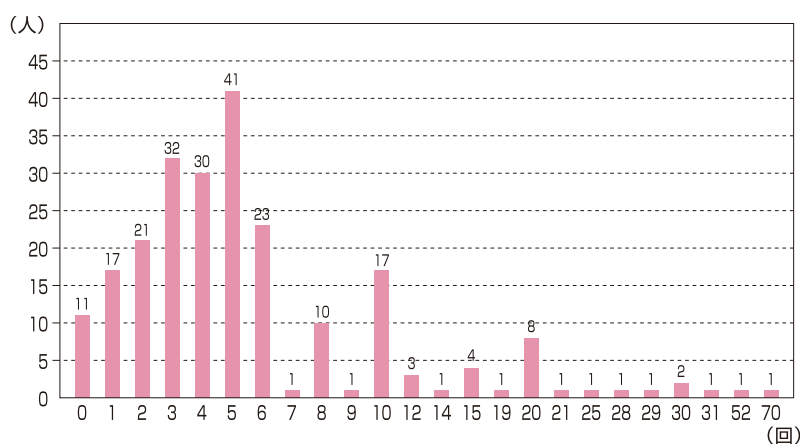
会員種別



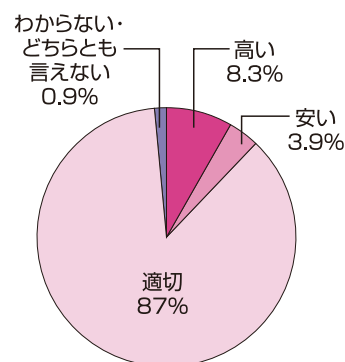
Q1. 会員の年代



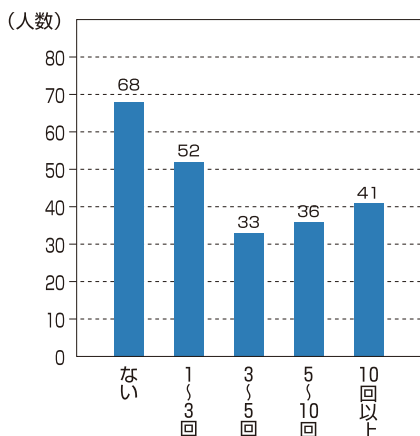
Q2. 入会動機



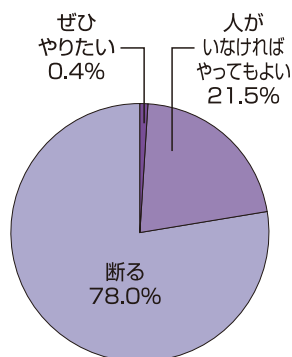
Q3. 来館回数 (2011年6月～2012月6月)



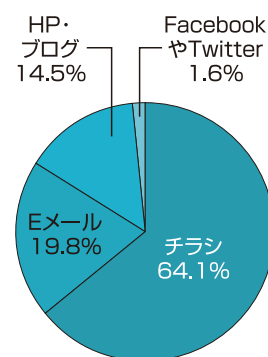
Q4. 会費について



Q5. 行事参加回数



Q6. 幹事への意志



Q7. 希望する広報手段

ご協力いただきました会員の皆様にはお礼申し上げます。
今後の友の会の在り方を検討する資料として参考にさせていただきます。(事務局 加藤)

連載

「浪花百景」 ～勝曼院愛染堂天王寺区夕陽丘～

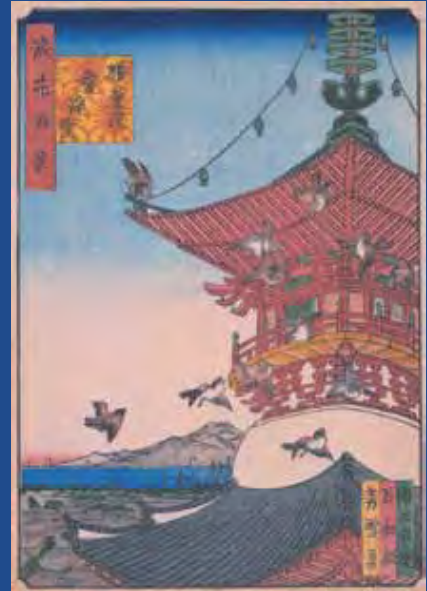
第16回

千倉 康由

四天王寺の別院の一つである施薬院があった場所と伝えられ、聖徳太子が勝曼経を講じたゆかりの地であることから『勝薬院』と名付けられたともいわれる。一般に愛染さんの名で親しまれ、毎年6月30日から7月2日にかけて行われる愛染まつりは、宝恵かごパレードが有名で大阪夏祭りの先駆けとして知られている。

また、小説家の川口松太郎さんがこの近くに住んでいたことから、映画化された『愛染かつら』のモデルとなった縁結びの霊木『愛染かつら』があることでも有名です。

境内の多宝塔は、慶長2年(1597年)の再建で、現在国の重要文化財に指定されている。地下鉄谷町線四天王寺夕陽丘下車徒歩3分のところにあります。



特別展 「天下の城下町 大坂と江戸」

現在の都市・大阪の起源は、豊臣秀吉が構想し建設した大坂城下町に求めることができます。ここに築かれた都市は、天下人の城下として、他の城下町とは次元の異なるものでした。一方、徳川家康の入部後に建設された江戸城下町もまた、天下の城下町としての性格を持っていました。江戸の都市空間は、大坂をはじめとする先行する都市の影響を受けながら建設され、逆に大坂の陣後に徳川の都市となった大坂の再建に影響を与えるものでした。本展覧会は、中世末から近世にかけての都市の変遷過程を縦軸に、大坂と江戸という巨大都市の比較を横軸に据えて、天下の城下町・大坂の特色を浮き彫りにしようとするものです。

平成25年2月2日(土)～3月25日(月)

◎休館日/火曜日 ◎開館時間/午前9時30分～午後5時(金曜日は午後8時まで)
※入館は閉館の30分前まで

◎会場/大阪歴史博物館6階 特別展示室

◎主催/大阪歴史博物館

◎特別協力/東京都江戸東京博物館

「京・大坂図屏風」右隻(部分)
(大阪歴史博物館蔵)



編集後記

今号の刊行に際して、会員みなさまにご寄稿をお願いしたところ、掲載させていただいた2本の文章を頂戴できました。また、今年度から幹事を辞任された千倉さんには、ひきつづき連載「浪花百景」をご執筆いただきました。この場を借りてお礼を申しあげます。

巻頭はひさしぶりのバス見学会の内容です。12月3日まで開催していた特集展示「大阪の茶の湯と近代工芸」と関連した見学会です。展覧会と見学会の連動は、博物館友の会の企画ならではのところでしょうか。ご協力くださった学芸員のお二人にお礼申しあげます。(友の会事務局 加藤)